古文入門

指導計画案

指導上の重点目標

【児のそら寝】

1　古典が親しまれてきた背景を考える。
2　歴史的仮名遣いに注意しながら音読する。
3　古文の基本的な学習の仕方を学ぶ。
4　主語と述語を対応させながら内容を正確に読み取る読み方を学ぶ。
5　場面の状況と登場人物の心情を把握する。
6　説話のおもしろさを味わう。

	学習活動	指導上の留意点
導入	❶ 日本の古典文学で、知っているもの、読んだことがあるもの（現代語訳も可）をあげる。どのような印象を持っているか、発表し合う。知技	❶ 生徒が小・中学校で学んだ古典などをあげ、生徒の興味を喚起する。
展開	❶ 「児のそら寝」を音読して、歴史的仮名遣いの読み方に慣れる。（「古文をよむために1」を参照する）思判表 ❷ 本文中の意味のつかめない部分を抜き出し、古語辞典で意味・用法を確認する。（「古文を読むために1」を参照する）→「言葉と表現」1 知技 ❸ 現代語訳する。誰が、何をしたという関係をたどりながら、話の展開をつかむ。知技 思判表 ❹ 児の心情の変化を話の展開に即してまとめる。思判表 →「学習のポイント」1	❶ 歴史的仮名遣いについては、無意識に読めるものとひどく違和感があるものがある。その双方を意識させて読ませる。 ❷ 古文特有の語や、現代語と形は同じでも意味の異なる語（古今異義語）を指摘させる。 ❸ 「待ちけるに」「ひしめき合ひたり」「待ちけるかともぞ思ふ」などの主語を把握させる。 ❹ 場面ごとの様子をつかんだうえで、それぞれの心情を考えさせる。
まとめと発展	❶ 僧の笑いの意味について考え、話し合う。主態 →「言語活動」1 ❷ 歴史的仮名遣いと内容について理解できたか、確認しながら	❶ 話のおもしろさがつかめたか確認する。 ❷ 語中・語尾の「は・ひ・ふ・へ・

【絵仏師良秀】

1　歴史的仮名遣いの表記に慣れて、古文の音読を読み味わう。

2　現代語と古語の違いを知って、辞書等で調べながら読解することを学び、古文の学習法について手掛かりを得る。

3　登場人物の行動をたどりながら内容を理解する。

		音読する。知技 思判表 ❸ 重要古語の意味・用法を整理する。知技
導入	❶ 絵仏師という仕事について説明する。 ❷ 仏像・仏画について知っていることを発表し合う。知技	❷ 生徒の興味を喚起する。資料集などを用いて画像を示してもよい。
展開	❶ 歴史的仮名遣いの読み方に注意して全文を音読する。（「古文を読むために1」を参照する）思判表 ❷ 本文中で現代語にない語、現代語と意味の異なる語などを指摘して、その意味を古語辞典で調べ、確認する。（「古文を読むために2」を参照する）知技　→**「言葉と表現」1** ❸ 現代語訳する。この話に登場する人物の心情とその変化を、順を追ってまとめる。知技 思判表　→**「学習のポイント」1** ❹ 良秀が絵を描くことに対してどのような考えを持っているかまとめる。思判表	❶ 範読や斉読を複数回試みる。本文で歴史的仮名遣いに該当する箇所をチェックさせて、なめらかに読めるようになるまで繰り返す。 ❷「あさまし」「わろし」「悪し」など重要古語の意味を古語辞典で確認する。 ❸ どのような感情から人々が見舞いに訪れたか、良秀の答えを聞いて、人々の感情がどのように変化したか、順を追って整理させる。 ❹ 良秀の発した言葉や行動について、なぜそのようにしたのかを順を追ってまとめ、考える。
まとめと発展	❶ 絵を描くことに対する良秀の考え方についてどのように思うか話し合う。主態　→**「言語活動」1** ❷ 歴史的仮名遣いと内容について理解できたか、確認しながら音読する。知技 思判表	❶ 結末の一文を手掛かりに、芸術作品とそれを生み出した良秀の人間性について話し合う。芥川龍之介「地獄変」と読み比べをさせて良秀の人間性について解釈を深めさせてもよい。

【大江山】

1　貴族の生活と和歌の関係を理解させる。
2　人物相互の関係と、各々の背景について大まかに把握させる。
3　和歌の修辞を理解し、話の内容に即した一首の意味内容をつかみ、小式部の機知を把握させる。
4　小式部と定頼の話を作者がどのように捉えているか読み取らせる。

導入	❶ 百人一首に「大江山」の歌が採られていることを話題にする。 ❷ 王朝貴族にとって和歌がどのような意義をもっていたかをとらえる。知技
展開	❶ 全文を音読する。（「古文を読むために1」を参照する）思判表 ❷ 重要古語の意味・用法を理解する。（「古文を読むために3」を参照する）知技　→**「言葉と表現」1** ❸ 現代語訳する。個々の人物の背景と、おかれている状況を把握する。知技 思判表 ❹ 定頼の言葉と小式部の和歌に込められた意味をそれぞれ考える。思判表　→**「学習のポイント」1・2**
	❶ 便覧や辞書などに百人一首があれば参照する。かるたとして親しまれた歌の背景として、よく知られた話であることを解説する。 ❷ 勅撰和歌集や歌合などについて説明し、日本の古典を読むうえで重要な鍵となる和歌についての興味を促したい。
	❶ 会話や動作の主体に注意させる。読む前に、歴史的仮名遣いの文字に印をつけ、そこに注意しながら読むように指導するとよい。 ❷ 古語辞典を引く習慣をつけさせる。用語の活用について理解させる。 ❸ 会話や動作の主体に注意させる。小式部内侍と母和泉式部について調べ、それぞれの人物の置かれている状況をつかませる。そのうえで、彼らの心情を理解させる。自分が「小式部」、「定頼」の立場だったらと想像して、彼らの気持ちを推測させるのもよい。平安文学の理解に必要な「宮中」「後宮」「女房」などの知識を身につけさせる。 ❹ ❸の人物の背景と状況を参考にする。特に小式部の母の和泉式部が歌人と

【単元の言語活動１　声に出して古文を読む】

１　歴史的仮名遣いの読み方のルールを理解する。

２　音読を繰り返し、滑らかな音読ができるようにさせる。

	❺和歌の中の掛詞を説明する。知技	日本語の特色の一つである「同訓異字」であることから、現代でも「しやれ」として残っていることに気づかせる。
	❻「かかるやうやはある」と定頼が言った理由を考える。思判表	❻❹❺を参考に、定頼の予想がどのように裏切られたのかを考えさせる。
	❼作者の考えが書かれている部分を指摘し、内容をまとめる。思判表	❼「これはうちまかせて…」以下の最後の部分から、教訓的な話として伝えられたことを読み取らせる。
まとめと発展	1「大江山」の和歌に用いられている掛詞についてまとめ、どのような点がすばらしいと考えられるのか、話し合う。主態 →**「言語活動」1**	1ワークシートや振り返りシートを活用し、「大江山」の歌に用いられた掛詞の意味を理解する前と話し合いの後で、「大江山」の歌への理解がどのように深まったか、自己評価する。
展開	1「古文を読むために1」を参照し、歴史的仮名遣いの読み方のルール1〜4に当てはまる箇所を「児のそら寝」「絵仏師良秀」「大江山」の本文から、それぞれ指摘する。知技 2「古文を読むために1」の1歴史的仮名遣いの読み方のルール5に当てはまる箇所を「児のそら寝」「絵仏師良秀」「大江山」の本文から、それぞれ指摘する。知技	1「古文を読むために1」に基づいて、古文を読む際に注意しなければならないルールとそのルールを適用する本文箇所をチェックする。ルビになっているところもルールの適用箇所かどうかを確認する。 2 1のルールと5のルールを二段階に用いている箇所に気をつける。

まとめと発展	
3 グループを作り、「児のそら寝」「絵仏師良秀」「大江山」の本文を間違えた箇所で交代しながら、順に音読する。知技 思判表 主態	3 グループでひとりずつ、説話三教材を順番に音読する。その際に間違えたところで交代するというゲーム的な要素を取り入れて、楽しみながら音読の練習ができるようにする。